

平成 22 年 6 月 3 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520691

研究課題名（和文） 第二次世界大戦下のオシラサマ信仰と民間巫者

研究課題名（英文） Oshirasama folk beliefs and mediums during World War II.

研究代表者

山田 巖子（ITSUKO YAMADA）

弘前大学・人文学部・准教授

研究者番号：20344583

研究成果の概要（和文）：第二次世界大戦下のオシラサマ信仰と民間巫者の活動を、戦前の影響と戦後の動向を考慮に入れながら調査した。その結果、以下のことが明らかとなった。①津軽地方では、明治以降、オシラサマは寺社信仰との関わりで信仰されてきた。②戦時中に民間巫者は「英霊」の口寄せを行っており、このような巫者たちは、1970年代に、新たな形で注目を受けていた。

研究成果の概要（英文）：We researched Oshirasama folk beliefs and mediums during World War II taking into consideration the influence of prewar days and postwar trends. As a result, the following was clarified. 1. Oshirasama has been believed in together with beliefs of shrines and temples in the Tsugaru region since the Meiji era. 2. The mediums that communicated with people who died during World War II attracted new attention in the 1970's.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：民俗学

キーワード：ナショナリズム フォークロリズム オシラサマ 民間巫者 戦争と民俗
危機のフォークロア

1. 研究開始当初の背景

青森県においては、第二次世界大戦前からの民俗芸能や民間信仰が、戦時中にも断絶されることがなく、戦後につながっていることが指摘されてきた。しかし、近年は、戦時下

に民間の習俗に新たな意味づけが与えられてきたことが、新たに注目されるようになった。

このような本県の戦時下の民俗としては、「英霊供養」のねぶた祭りや戦勝祈願の岩木山登拝行事などが注目されてきた。これらの

〈習俗〉は、金子直樹らによって、地方翼賛運動との関連で、〈民俗〉の二次利用を示すフォークロリズムの枠組で論じられる傾向にあった。

青森県における民間巫者の活動についても、第二次世界大戦中、盛んに戦死者の口寄せが行われていたことは既に池上良正によって論じられている。池上は青森県の地方紙『東奥日報』の記事の分析を通して、青森県においては、戦時中の民間巫者への弾圧は沖繩などに較べて比較的ゆるやかであったと述べている。池上は、第二次世界大戦中に民間巫者たちは、日本の神信仰の末端に位置づけ直されたと見ている。

申請者は、第二次世界大戦中の青森県の民間巫者の活動と巫者の関わるオシラサマ信仰は、戦前、戦中、戦後の、制度と「慣習」の関係史から見ていかなければならないと考え、本研究を申請した。

第二次世界大戦中の特異な「習俗」とみえるものを、国家との関係で突如現われたものと捉えるのではなく、近代以降の変遷史の中で位置づけるべきものであると考えた。ここでは、体制による〈民俗〉の二次利用という視点の他に、地域の中に埋め込まれたものが非常時に発動する、「危機のフォークロア」（川村邦光『幻視する近代空間』）として捉える視点も必要であると考えた。

また、戦時下に生まれた新たな「慣習」が戦後にも影響を及ぼしていると考えた。この視点から現行の「慣習」を、第二次世界大戦下、戦前へと逆照射していく作業も必要になる。

これらの仮説から、第二次世界大戦下のオシラサマ信仰と民間巫者の活動を、戦前、戦中、戦後のタイム・スパンで、聞き取り調査を行うと同時に戦前からの刊行物や郷土誌を精査して、実態を把握する必要があると考えるに至った。

2. 研究の目的

本研究は、青森県における近代以降の民間巫者とオシラサマ信仰の展開を位置づけながら、第二次世界大戦下のオシラサマ信仰の位置づけを行うものである。

これは戦時中という「異常時」に従来のフォークロア的なものがどのように発動したのかを問い、あわせて、このような「異常時」の民俗が、戦後の民間信仰や民間巫者のあり方とどのように関わったのかを問うものである。

また、それらの〈民俗〉慣行が、それぞれの時代にどのような文脈の下に行われていたのか、その位置づけを行うものである。

3. 研究の方法

研究課題に対して、以下のような対象を、次のような方法で調査した。

- (1) 津軽地方でのオシラ講への参加と聞き取り調査
- (2) 津軽地方（西津軽郡鱒ヶ沢町）と南部地方（八戸市南郷区、三戸郡南部町）におけるイタコへの戦時下の巫業に関する聞き取り調査
- (3) イタコの口寄せの場である上北郡おいらせ町法蓮寺のイタコマチへの参加と聞き取り調査
- (4) 津軽地方と南部地方での戦時下の生活の実態とオシラサマ信仰、戦死者供養の聞き取り調査
- (5) 青森県立図書館、八戸市立図書館、三戸市立図書館、弘前市立図書館、国会図書館における、近代以降の青森県の地方紙、郷土誌、既刊報告書の関連記事の調査

4. 研究成果

聞き取り調査と文献調査によって明らかとなったことは以下の通りである。

(1) 戦死者の口寄せの様態

第二次世界大戦中、昭和28年、昭和40年代に、戦死者を口寄せした記憶や記録が確認できた。

戦時中、戦死者の口寄せが盛んに行われたという記述が先行研究には見られるもののその具体的な様態については必ずしも明らかではなかった。

津軽地方、南部地方ともに、第二次世界大戦中もイタコの口寄せへの依頼は平時と変わらず行われていた。上北郡おいらせ町法蓮寺では第二次世界大戦中も、7日盆の行事であるイタコマチが行われていた。

青森市内の聞き取り調査によって、第二次世界大戦中のイタコによる口寄せは、戦死者を真っ先におろすものであったという証言を得られたが、二人の体験者は体験時には年齢が幼く、不明な点が多い。体験者はハナオロシとの関連でこの記憶を語っており、津軽においては若年層の戦死者の口寄せは若年者や幼年の者を特別鄭重におろすハナオロシの習俗との関係性を考慮に入れる必要があることが分かった。

また、西津軽郡鱒ヶ沢町在住のイタコからの聞き取り調査では、戦時中に戦死者をおろしたことがあることが確認できた。戦死者は他の死者と口寄せの方法が違うと語っていた。

戦後の聞き取り調査の資料では、終戦後すぐに、戦死者の口寄せの依頼が多かったとい

うイタコの証言がある。

昭和 28 年に現五所川原市金木町の川倉地蔵尊での「英霊」のホトケオロシは「イタコ」によるものと記録されていたが、関連資料の調査により、これは晴眼のカミサマと呼ばれる民間巫者によることが明らかとなった。

(2) 戦死者の口寄せの文脈の変化

昭和 40 年代になると、恐山で、青森県以外の依頼者が「英霊」の口寄せを依頼している例がみられた。このような事例の中には、1960 年代後半から巫業を始めた比較的経験の浅いイタコも含まれ、「伝統」的なものであるかどうかは一定の留保がつく。

また、下北地方において、戦死者を死者の中でも最初に下ろす習俗が忘れられていた際に、イタコによって下ろされた戦死者の霊がそれを戒めるという事例もみられた。

これらの調査結果から、現在の段階では、戦時下の「英霊」の口寄せについては、その痕跡がうかがえるものの、具体的な内容が確認できるものは戦後のものしかないことが分った。

また、戦死者を靖国神社からおろすといった趣向は、そのような形を取らないイタコの証言から、依頼者が「英霊」という思想をどの程度内面化しているかが問題となると推測された。

昭和 40 年代以降の戦死者の口寄せは、従来の依頼者ではない者から新たに需要がおこってきたことを考慮に入れる必要がある。

また、オシラ講の調査や聞き取り調査から、以下のことが明らかとなった。

(3) 津軽におけるオシラサマ信仰の文脈

津軽地方においては、オシラサマ信仰は、近代以降、寺社の巡拝行事と結びつき、寺社信仰の下部に位置づけられる傾向が強かったことが明らかとなった。

(4) 戦時下のオシラサマ信仰

戦時下ではオシラサマは身代わりへの信仰から、「弾除け」の御利益が期待されていたことが明らかとなった。

オシラサマのセンダク（衣装）は弾除けの護符として需要があり、出征兵士がもらい受けに来た例や防空頭巾に用いる例があった。

さらには、国防婦人会の襷をかけた女性がオシラサマを手を持っている写真や、軍服と看護婦姿のオシラサマ像が久渡寺に飾ってあった、という記録から、戦勝祈願とも結びついてきたと考えられる。

(5) 現在のオシラサマ信仰

現行の津軽地方におけるオシラ講では、イ

タコやカミサマを呼んで占いをする行事の際に、これらの民間巫者たちが、シチカムラやセツ所かける、などと呼ばれる寺社の巡拝行事に言及していることが明らかとなった。

また、オシラサマを「授かる」と称して、オシラサマにふさわしい桑の木を発見することに何らかの意味づけを行って、新たにオシラサマを祀り始める傾向が広く見られた。

以上の調査結果から、近代以降、民間信仰と民間巫者たちへの信仰は、新たな「知識」の社会的配分によって、その時々で新たな意味を発見され、つけ加えられながら持続しており、それらの経緯が、あたかも、戦前、戦中、戦後と均質な民俗事象が連続しているように見せていることが明らかとなった。

なお、これらの研究成果は山田巖子編『第二次世界大戦下のオシラサマ信仰と民間巫者』(平成 19 年度～21 年度科学研究補助金(基盤研究(C))研究成果報告書)(20010 年 3 月 31 日発行 弘前大学)として刊行した。報告書の内容は以下の通りである。

「(1)はじめに

(2)巫女と戦争

—東北における危機のフォークローア—

(『国文学 解釈と鑑賞』73 巻 8 号掲載の同名の論文と、山田巖子「第二次世界大戦後の東北日本における巫女と英霊」〈国際日本学研究会第 3 回学術大会口頭発表 2009 年 9 月 23 日 於：韓国 高麗大学〉を基に稿を成したもの)

(3)津軽におけるオシラサマ信仰の展開

(ハンナ・ジョイ・サワダ、北原かな子編訳『日本語と英語で読む津軽学入門』〈弘前大学出版社 2008 年 2 月〉所収の同名の論文を加筆訂正したもの)

(4)祭祀者の身体と神像

—青森県津軽地方におけるオシラサマ信仰を起点として—

(山田巖子「祭祀者の身体と神像—津軽のオシラサマを起点として—」〈青森県民俗の会主催・平成 21 年度青森県学術財団助成事業シンポジウム「東北のオシラ神を探る」口頭発表 2009 年 9 月 23 日 於青森市男女共同参画プラザ・ダガール〉と、山田巖子「桑の木に宿る神—青森県津軽地方におけるオシラサマ信仰の現在—」〈平成 21 年度国立民俗学博物館国際研究集会「民俗の中の植物—日韓比較の視点から—」口頭発表 2009 年 12 月 24 日 於：国立歴史民俗博物館〉を基に稿を成したもの)

資料編

(5) オシラサマ関連記事

- (6) 「英霊」の口寄せ関連記事
(7) 津軽のイタコの託宣記録

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 山田巖子、安代地区における民俗研究の課題、八幡平市博物館編・発行、八幡平市博物館紀要、査読無、開館10周年記念号、2008、14-21

② 山田巖子、巫女と戦争—東北における危機のフォークローア—、国文学解釈と鑑賞、査読無、73巻8号、2007、147-155

[学会発表] (計1件)

山田巖子、「世間」の変貌と「語り」—戦中戦後の巫女をめぐる—、日本口承文芸学会例会シンポジウム「今、『世間』を問う」2010年3月20日 於：國學院大学

[図書] (計2件)

① 山田巖子、第二次世界大戦下のオシラサマ信仰と民間巫者、弘前大学、2010、47
平成19年度～21年度科学研究補助金(基盤研究(C))研究成果報告書

② 山田巖子、津軽におけるオシラサマ信仰の展開」ハンナ・ジョイ・サワダ/北原かな子編訳『日本語と英語で読む津軽学入門、弘前大学出版会、2008、188-199 Yamada Itsuko
The Evolution of Oshirasama Folk Beliefs in the Tsugaru Region
Translated and Edited by Hannah J. Sawada and Kitahara Kanako
An Introduction to TSUGARU STUDIES in Japanese and English

[産業著作権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 巖子 (Yamada Itsuko)

弘前大学・人文学部・准教授

研究者番号: 20344583

(2) 研究分担者

研究者番号:

(3) 連携研究者

研究者番号:

